

第 34 回国際化学生態学会(ISCE)参加報告

弘前大学農学部生物学科
助教
山尾 僚

第 34 回国際化学生態学会(International Society of Chemical Ecology) は、8 月 1 2 日～17 日の日程でハンガリーの首都であるブダペストで開催された。本学会は、様々な生き物の生態、または生態系を化学物質レベルで理解することを目的としており、毎年各国持ち回りで開催される。今大会は、Miklós Tóth 博士と Zoltán Imrei 博士をホストとして開催された。



写真 1. ドナウ川から眺めるハンガリーの国会議事堂。

化学物質を介した生物間の相互作用は、植物、動物、微生物などの様々な生物群に観られ、その解明において専門的な化学分析技術が必要不可欠である。このような背景の中、国際的な情報交換や共同研究は研究の推進において欠かすことができない。シンポジウムの会場のみならず、休憩時間であってもここぞとばかりにパソコンを持ち出し、データを見ながら議論する様子が見られ、本学会が化学生態学における国際的な情報交換や議論の貴重な場となっていることを実感することができ、大変刺激的であった。ポスター会場では、昆虫の寄主植物の認識機構や害虫のフェロモントラップの効果など、基礎的な研究発表から応用的な研究発表まで多様なテーマの発表がみられた。

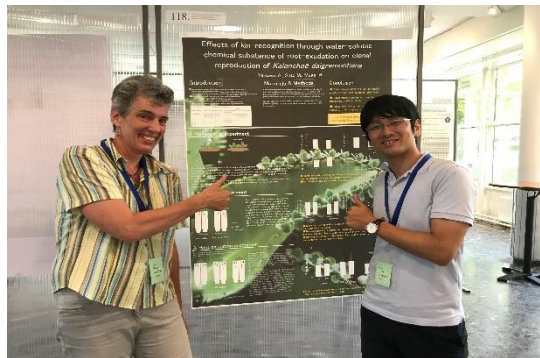


写真 2. 口頭発表会場の様子とポスター発表の様子。

私は『Effects of kin-recognition through water-soluble chemical substances of root-

exudation on clonal reproduction of *Kalanchoe daigremontiana*』と題したポスターにて、外来植物であるコダカラベンケイソウの遺伝子型に応じた競争応答について発表を行なった。様々な国で、侵略的な外来種として知られるコダカラベンケイソウがクローン間の競争を根から放出される水溶性の化学物質をキューとして回避することを報告した。本発表には、ドイツの植物を材料に活躍されている化学生態学者である Nicol van Dam 博士をはじめ多くの方々が足を運んでくださり、コメントをいただいた。特に van Dam 博士とは、今後の共同研究で根の浸出液等の化学分析を進めていく方針で打ち合わせをすることができた。今後、外来植物を中心に植物間コミュニケーションにかかわる物質が特定されれば、それらを阻害するなどの新たな防除技術の開発も期待できるだろう。

今回、報農会から ISCE の参加を補助していただいたことで、貴重な経験をすることができ、国際的な研究協力関係も築くことができた。今後も本助成で築いた国際協力関係をベースとして、農学および植物防疫研究を国際的に発展させたい。改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。